



静岡大学未来の科学者養成スクール(FSS)事業

活動についてはウェブサイトへ <https://fss.shizuoka.ac.jp/>



自治体と連携して実施した野外実習に臨む受講生

2026年度は、のべ70名の高校生を対象に 高度で体系的な教育プログラムを実施します

本事業は、将来の科学技術発展を担う人材を育成するため、高校生を対象に、地域の課題解決への挑戦や国際活動、豊富な討議や発表などが経験できる高度で体系的なプログラムを実施しています。「つなげる力」に主眼を置き、多様な背景を持つ人々と協働する力、異なる分野の知識をつなげる力を養います。今年度は、のべ70名の高校生を支援する予定です。



受賞した焼津中央高校自然科学部の皆さん

焼津中央高校の自然科学部が世界のコンテストで4位入賞！

本事業で支援した焼津中央高校自然科学部のグループが、2025年の日本学生科学賞で応募数3万8千件の中から1位の「内閣総理大臣賞」を受賞しました。さらに、世界最大級の高校生科学研究コンテスト「リジェネロン国際学生科学技術フェア(ISEF)」に日本代表として参加し、1400件が参加するなか、動物科学部門の4位に入賞しました。本事業で育てた地域の優秀な人材が、将来静岡に「知」を還元する。この「知の循環」を生み出すことで、静岡大学が地域の「知の拠点」としてさらなる発展を遂げることが期待されます。

若者の探求心を伸ばしていくために、 ご協力をお願いします

静岡大学の学生や教員にとっても、高校生たちの研究を指導・サポートする経験は、その斬新な発想や純粋な知的好奇心が大きな刺激となっています。しかし、これまで本事業の財源となっていた科学技術振興機構(JST)の支援が期間終了となり、本学の独自財源だけでは事業の継続が危ぶまれている状態です。そこで、このたび本基金を設立し、ご支援を広く呼びかけることとなりました。



運営に携わる理学部
石原顕紀教授

地域に根ざす国立大学のミッションとして、小中高大の連携強化による人材育成はとても重要であり、これからも多くの優れた人材を輩出していきたく考えています。未来を創る若者への投資として、本事業へのご寄附に、皆様の温かいご支援をよろしくお願いいたします。

ご寄附は
こちらから



静岡大学未来創成基金ウェブサイト <https://kikin.adb.shizuoka.ac.jp>

静岡大学広報・基金課基金係 電話:054-238-5183 E-mail:kikin@adb.shizuoka.ac.jp



@ShizuokaUniv_PR

イベント情報や研究成果など、
静岡大学の最新情報を
発信しています



ぜひフォローしてください！



静岡大学キャンパスキャラクター
しずっぴーLINEスタンプ

販売中！

40種類/190円



ご購入はこちらから！



//////////////////////////////////// アンケートにご協力ください //////////////////////////////////////

誌面に関するWEBアンケートにご協力ください。ご回答いただいた方の中から抽選で10名様に「静大オリジナル A6 ミニノート」をプレゼントいたします(全4種類のうち、いずれか1種類をランダムでお送りいたします)。当選者の発表は、賞品の発送をもって代えさせていただきます。



※絵柄は
選べません



左記二次元コードから
アクセスいただき、
WEBにてご回答ください。
応募締切:2026年12月31日(木)

編集後記

今号では、「グローバル共創科学部」の魅力について紹介しました(P1・2)。令和5年4月の設置から今年で4年目を迎え、本年度ついに1年生から4年生までが揃いました。また、令和9年4月の「大学院グローバル共創科学研究科」の開設に向けた準備が進められています。教育・研究のさらなる発展に、ぜひご期待ください。



SUCCESS

静岡大学広報誌 サクセス

特集

進化する学びを学生がレポート！ グローバル共創科学部

／ソーシャルウェルネスの実現

Shizuoka
University
Current affairs &
Connective paper for
Every graduate
Student &
Staff



Autumn 2026



静岡大学で27年ぶりの新学部として2023年春にスタートしたグローバル共創科学部は、今年で4年目を迎えました。魅力ある学びがいっぱいのグローバル共創科学部の今をご紹介します！

魅力1 フィールドワーク科目 コラボラティブ・ワークス 他者と協働し、知をつなぐ方法を 実践的に身につける！

本授業は、学生が複雑化する社会的課題への取り組み方を学び、持続可能な未来づくりの担い手(共創型人材)として育つことを目的とするフィールドワーク科目です。実際に課題が生まれる現場で、専門家や企業、自治体、地域住民など現場の関係者とともに課題解決に向けて協働する経験を積みます。取り組むテーマは福祉や環境、スポーツなどさまざまで、企業との共同研究や自然観察、まちづくりなどテーマに適した方法で行います。



農家の皆さんとお茶を収穫

自分の関心のある農業の現場に直接関わることができるのが一番の魅力です。中山間地域で農家の皆さんや多くの関係者との活動をおして“責任感”も学びました。

3年
柳岡俐日人さん



4年目を迎えてますます進化しています

文理融合の「総合知」を育む本学部は1～4年生が揃う完成年度を迎え、2027年春に第一期生を送り出します。コラボラティブ・ワークスや海外研修、防災等の地域実践による体験学習で培った学生の主体性と探究力は極めて高く、共創型ステークホルダーズ・ミーティングの開催を通じて、その真価を広く地域に発信しています。共創アプローチの理念のもと、新研究科への進学や多領域での躍進など、未来を拓く多様な挑戦に大きな期待が寄せられています。



グローバル共創科学部長
江口 昌克 教授



オーストラリアで海外研修



静岡市内のお寺で
子どもたちと勉強

地域で子どもの居場所づくりに取り組んでいます。地域で定期的に活動することで、現地の方が抱えている課題をより具体的に把握することができました。

3年
(左) 前田楓季さん
(右) 吉野来南さん



自転車ツーリズムの取り組みを学習



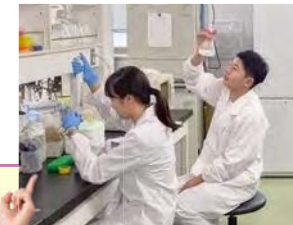
日本最大のモスク(東京・渋谷区)で
訪れた皆さんと交流



グローバル共創科学部 進化する学びを学生がレポート！

魅力2 文理融合 文系・理系の枠にとらわれない学びを実践！

高校では文系選択でしたが、「バイオエコノミー概論」や「カーボンニュートラル科学」などの授業をきっかけに理系の研究室に所属し、微生物の代謝活動による環境浄化作用について研究しています。文系・理系の両方の視点から研究活動に取り組んでいます。



研究室メンバーと実験中



4年
西森天飛さん

魅力3 海外研修 留学を支援！半数以上が留学を経験

大学に入ってから留学を意識するようになり、留学前はオーラルコミュニケーションの授業で英語を話すことに重点を置いて準備しました。学部全体が留学に協力的で、約1年のルーマニアでの留学中も先生方にはオンラインなどで多くのサポートをしていただきました。



さまざまな国籍の留学先の
友人たち



4年
徳留香雪さん

魅力4 学び+地域社会の視点 異なる分野を組み合わせることで学びを深める！

高齢者の継続的な運動が認知機能の維持・改善にどのような影響を与えるのかをテーマに研究しています。運動や健康に関する知識だけでなく、地域での活動をととして学んだ地域の視点・課題も取り入れ、複数の分野を組み合わせた研究を進めています。



地域住民に運動プログラム
について説明



4年
三浦舞彩さん

魅力5 学びを社会で実践 在学中から社会課題解決に向けアクション！

災害ボランティアなどの社会貢献活動の経験を活かし、ボランティア活動をする静大生がつながる学生団体を立ち上げたほか、防災分野の全国学生間ネットワークの構築に挑んでいます。学部で学んだ幅広い視点で物事を見ることやファシリテーション能力などが役立っています。



災害に関する募金活動を実施



4年
西ヶ谷直樹さん

グローバル共創科学部 最新News！



静岡大学
グローバル共創科学部
WEBサイト

＼New!!／ 入試が変わります

本年度実施する令和9年度入試(主に現在高校3年生の方を対象とする入試)から、定員、募集枠、選抜方法等を変更します。高い実践的経験や探究活動に取り組んできた方が、その成果と問題解決力を発揮し、さらに発展させることができる入試へと変更します。

＼New!!／ 大学院ができます

令和9年4月に大学院修士課程「グローバル共創科学研究科」を設置します。文理融合の「総合知」を駆使して地球環境の問題から国際・地域コミュニティの持続的ウェルビーイングの創出が可能な共創型研究を主導できる高度な共創型人材の養成を目指します。



くわしくは
こちら



くわしくは
こちら

みんなが健康で安心して暮らせる社会へ

ソーシャルウェルネスの実現

静岡大学は「自由啓発・未来創成」の理念のもと、静岡県に立地する総合大学としてさらなる地域社会の期待に応えるため、「静岡大学未来創成ビジョン」を定め、県全域との共創により「オール静大」で取り組んでいます。

「静岡大学未来創成ビジョン」に掲げる9つの目標のうち、「G1: ソーシャルウェルネスの実現」について、推進担当の副学長にお話を伺いました！

ソーシャルウェルネスの実現って？

一人一人が体も心も、そして社会的にも健康で安心して暮らせる社会を目指すということです。それぞれがいきいきと暮らせることが、社会の安定的な基盤となり、次の成長にもつながっていく、今、とても大事な目標です。



副学長 (DE&I推進担当)
グローバル共創科学部
吉川 真理 教授

副学長 (リスク管理担当)
人文社会科学部
高倉 博樹 教授

異分野の協力が課題解決につながる

例えば、スマートウォッチの健康管理の機能は、生体センシング、ウェアラブルデバイスの技術や、スポーツや運動生理学の観点、個人情報情報を安全に取り扱うための法的知識など数多くの専門分野で成り立っています。このように複雑な課題を解決することや、社会を変えようとする新しい段階には、異分野で協力することが重要です。

静岡大学だからこそできる挑戦

本学独自の「プロジェクト研究所」制度を活用し、分野を超えた研究者がチームで研究を進めています。例えば、「ピアノとウェルビーイング研究所」では、音楽の効果を科学的に考えるレクチャーコンサートを開催したほか、「デジタル社会における法的対応研究所」では、介護分野でAIなどの最先端技術の活用を進める上での法的支援を研究しています。今後も、異分野で協力しやすい環境づくりを進めていきます。

「静岡大学未来創成ビジョン」
推進の動きを発信中！



研究者交流会を開催

6月4日に浜松キャンパスで「G1: ソーシャルウェルネスの実現」の推進に向けて研究者交流会を開催し、浜松キャンパスから15名、静岡キャンパスから31名の教員が参加しました。研究者間による情報共有、アイデアの交換等を通じて、新たな異分野融合研究に繋げることを目的としています。

異分野を専門としながらも関連性が高いテーマに取り組む研究者間で行われたグループセッション。「医療・介護を支えるXR・AIスマートケア基盤」「文化・芸術・学習による孤立予防と地域参加」など多様なテーマが設定されました。「新しい価値観を取り入れられて有意義だった」との感想がありました。



研究者の研究背景によって着眼点が異なり、AIやWell-beingの解釈の多様さを感じました。他学部の研究者とも継続的に交流していきたいです。

情報学部 石川 翔吾 准教授

現在の研究テーマは、AIやXR等の情報技術を活用した障害当事者と支援者への支援技術開発など

各々が感じている課題に対する技術的なギャップを、異分野の研究者との協力で解決することができ、より大きい課題に対応できるように感じました。

工学部 中村 伊吹 助教

現在の研究テーマは、生体・映像情報による状態推定とバイオフィードバックシステムの開発など

学部や分野を超えた交流を通じて、大学全体としての一体感を醸成する良い機会になったと思います。将来的に連携につながる可能性を感じました。

農学部 鮫島 玲子 准教授

現在の研究テーマは、持続可能型農業に向けた土壌微生物の活用など

様々な分野の研究がソーシャルウェルネスに関連しており、介護などの分野でもAIやDXが広く活用されつつある現状を把握する必要性を感じました。

未来社会デザイン機構 内山 智尋 准教授

現在の研究テーマは、地域福祉の視点を取り入れた「地域づくり」の実践など



静岡大学は、「研究フェロー制度」および「若手重点研究者制度」を導入し、競争力のある研究の推進や世界で活躍する人材の育成に取り組んでいます。本号では、第6期（2025～2027年度）に選定された「若手重点研究者」から3名をご紹介します。



「研究フェロー・若手重点研究者」のウェブサイトをリニューアルしました！
本ページでご紹介している3名のほか、
研究フェロー・若手重点研究者全員の特設ページをご覧ください。



人文社会科学部 社会学科 講師

望月 美希
MOCHIZUKI Miki



研究室ウェブサイト

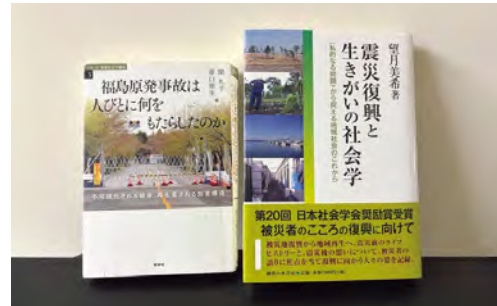
若手重点研究者



地域社会学の視点から災害復興・防災まちづくりを考える

地域社会学、農村社会学を専門として、災害復興と支援、防災・減災の研究をしています。特に東日本大震災により津波被害を受けた宮城県沿岸部における生活復興、福島第一原発事故に伴う長期・広域避難について、10年以上にわたりフィールド調査を行ってきました。宮城県沿岸部では、農村における生きがいの回復、福島原発事故避難に関しては、福島県浪江町の伝統産業「大堀相馬焼」の復興を例として、生活に根差した生業（なりわい）を取り戻すことの意味や、人と土地の関係を検討しています。これらの研究を通じて、生存(survive)に留まらない、生活(life)の復興とは何かについて考えています。

静岡県は災害と隣り合わせの地域ですが、海や山とともに暮らす豊かさにも恵まれています。現在は、静岡のまちづくりを考える「静岡まちなか研究所」の活動も行っています。



東日本大震災・福島第一原発事故に関する主な著書

沿岸海域の物質循環を多様な観測アプローチで明らかにする

様々な沿岸海域で現場観測を行い、温室効果ガスである二酸化炭素・メタン・一酸化二窒素の収支推定をしています。気候変動の影響を評価するためには、詳細な現場観測データが必要です。近年、観測網の整備により、利用できるデータは飛躍的に増加していますが、沿岸海域は時空間変動がとても大きいので、継続的に現場観測を行っていくことが不可欠です。また、沿岸海域の物質循環を明らかにするためには、流域河川や下水処理場での観測、昼夜を通した連続観測、時には手漕ぎボートでの観測、水中だけではなく堆積物や大気からの流入物質の測定など、多様な観測アプローチが求められます。



研究のメインフィールドの東京湾と観測船

現場観測は大変そうに思われがちですが、大都市に囲まれた都市沿岸海域や雄大な自然環境の中で、自分の目で見て、肌で感じながら観測できることはとても魅力的な体験です。

理学部 地球科学科 准教授

久保 篤史
KUBO Atsushi



研究室ウェブサイト

若手重点研究者



教育学部 教科教育学専攻
社会科教育専修 准教授

佐藤 正志
SATO Masashi



静岡大学
教員データベース

若手重点研究者



地方圏の生活を支える公共サービスをめぐるガバナンス

人文地理学を専門にしながら、地方自治や公共サービスについて研究しています。特に、地方圏での生活を支える公共サービスのあり方に着目しています。地方圏では、人口減少や少子高齢化が進む中、今後も安定した公共サービスを提供し続けるために、地方自治体だけでなく、民間企業や非営利組織、住民団体などが相互に協力することが求められています。こうした中で、公共サービスの提供や維持に関わる様々な組織の特徴的な活動だけでなく、提供や運営をめぐる組織間相互の協力、連携や交渉（ガバナンス）に着目しながら、よりよい公共サービスの提供のあり方を考えています。

大学の地理学では、地表面の様々な現象（地）を、背景や要因を踏まえて説明する（理）ことを目指します。この説明を考える点が地理学の面白さであり、魅力にもなっています。



研究 PRESS RELEASE

研究成果を発表して報道されたものをご紹介します
2026年2月～7月

- 田上陽介(農学部)「葉の微細構造がつくる“選択的防除”のメカニズム 一天敵を邪魔しない植物の防御戦略の仕組みを解明」
- 富永晃好(農学部)「ガーベラの全ゲノムを染色体レベルで解読 ―キク科植物の進化と分子育種を加速する基盤情報を確立―」
- 野村肇宏(理学部)「単層の氷の構造を初めて可視化 ―渦状に並んだ水分子がつくるフェロアキシャル秩序を実証―」他1件
- 塩田真吾(教育学部)「静岡県警人身安全少年課の監修のもと『SNSでの誤情報の拡散を考えよう』の教材を開発」他2件
- 清水康弘(理学部)「量子化された“相対論的”準粒子を微視的に観測 ―ディラック電子の量子ホール効果の特異性を解明―」
- 栗井 光一郎(理学部)「宿主タンパク質が外来オルガネラ内で機能する『分子キメラ』の実証」
- 鳴海哲夫(工学部)「ペプチド主鎖改変により膜透過性向上 ―アミドクロロアルケン等価置換が水素結合ネットワークを制御―」
- 大矢恭久(理学部)「世界で初めて核融合炉向けW-Re合金における水素同位体プラズマ駆動透過実験を実施」他2件
- 徳元俊伸(創造科学技術大学院)「マイクロプラスチックの魚類体内への取り込みを透明金魚を用いて可視化」
- 符 徳勝(工学部)「リラクサー強誘電体の長年の謎を解明 ―ナノ極性領域の成長と相互作用を初めて直接観測―」
- 河合 信之輔(理学部)「Mimicking Nature's Twist: Time-Evolving Helicity in a Polymer」
- 中塚貴司(農学部)「ゲノム編集技術を用いてトルコギキョウを鉢花に適した草姿に改変」
- 中村彰彦(農学部)「深海インスパイアード化学による分解の見える化 ―セルロースからキチンへ、界面センシング原理を拡張―」
- 狩野芳伸(グリーン科学技術研究所/情報学部)「統合失調症の発話に共通する“言語の3要素”を自然言語処理で同定」
- 関 朋宏(理学部)「液晶性分子骨格を結晶格子に組み込み、伸縮する分子結晶を合理的に設計」
- 村野正景(情報学部)「世界遺産・コパン遺跡の地形計測に協力 ―ホンジュラスのマヤ文明遺跡の調査研究に森林計測で貢献―」
- 長尾 遼(農学部)「光化学系IIの表在性タンパク質を再構成した構造から酸素発生活性低下の一因を解明」他1件
- 藤井基貴(教育学部)「静岡大学と丸石製菓、尼崎市に『防災×感染対策』紙芝居を寄贈」他1件



あん どう たか し 安藤 隆史 さん

情報学部
総合科学技術研究科 情報学専攻
(2020年3月卒)

日立ヴァンタラ株式会社
(ソフトウェアエンジニア) 勤務

1996年生まれ、岐阜県立海津明誠高等学校
趣味は日本散策 (バイクツーリング・スキューバダイビング)
好きな言葉は「Fear always springs from ignorance (恐れは常に無知から生じる)」

情報技術を学ぶため、国立大学で最初に 情報学部を設置した静大へ

スマートフォンの普及が小型化・高性能化とともに進んだのが、ちょうど私が高校生の頃でした。クラウドと連携した高度なデータ活用が社会で急速に現実化する中で、情報技術に興味を抱くようになりました。静岡大学は、国立大学として初めて情報学部を設置した大学で、商業高校の私にとっても挑戦しやすい入試制度である「専門高校枠」があったことから、入学を決めました。

自ら手を動かし、 設計・開発に没頭した大学時代

大学では、バイクの挙動データを市販の安価なセンサで取得し、データ補正処理によって高価なセンサに近い精度を実現する研究を行いました。データ収集手段そのものも重要であったため、センシングデバイスの設計・開発からモバイル通信を利用したデータ収集システムの構築、データ処理・可視化まで、一連のシステムを自ら実装しました。また、この研究とは別に、個人的な興味から既存技術をあえて自力で再実装するなど、多種多様なプログラム開発を通じて技術への理解に没頭しました。



サイクリング部で北海道ツーリングに参加。重い荷物をつけて連日100kmを走った。

世界各地で稼働するシステムに 製品を提供する喜び

モノづくりがしくて、組み込みソフトウェアエンジニア職に就き、現在、国内外向けブロックストレージ製品のファームウェア設計・開発を担当しています。金融機関や公共性の高い

システムなど、世界各地で稼働する「停止が許されないシステム」に提供されることもあり、高い品質が求められます。基本設計からプログラミング、評価まで一貫して携わり、自ら作り上げた製品を世界中のお客様に届けられることに魅力を感じています。

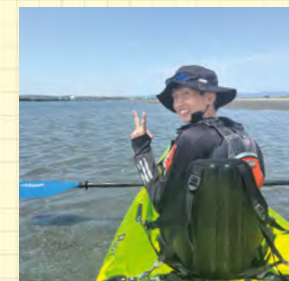
今後は、AI活用で製品の品質向上を 目指す

弊社のブロックストレージ製品には、長年の知見・製品固有設計ポリシーが盛り込まれています。今後はそれら技術資産をベースに生成AIを活用した生産性向上や品質向上の取り組みを加速させ、信頼性を確保しつつ市場ニーズに迅速に応える製品開発を牽引できる技術者になりたいです。



初めて自分でゼロから設計・実装・評価した機能が入った製品(展示用にセットアップ)

失敗を恐れずにまずやってみよう



休日は、海から山まで、行ったことがない場所を知ることを楽しんでいます(写真は浜名湖でのカヤック)。

「知っていること」と「実際にやったことがあること」の間には、大きな差があります。失敗をすることもあるかと思いますが、その積み重ねが、ふとした時に自分の大きな力になります。学生の皆さん、ぜひ失敗を恐れず、様々なことに挑戦してみてください。



いし だ きょう た ろう 石田 京太郎 さん

工学部
総合科学技術研究科 工学専攻
(2025年3月卒)

三菱電機株式会社(設計開発) 勤務

2000年生まれ、愛知県立旭野高等学校
趣味はPC、ボードゲーム
好きな言葉は「首尾一貫」

シミュレーションなど 情報技術も学べる静大へ

高校生の時、得意な数学を活かして情報工学を学びたいと考えていました。静大の数理システム工学科は、数理モデリングや最適化、データ分析といった数学的手法に加え、シミュレーションやネットワークなどの情報技術も幅広く学べるのが魅力で、進学を決めました。在学中は、コンピュータでも解くことが難しい問題に対し、アルゴリズムの構築や探索手順の改良によって、より短時間で質の高い解を導き出す方法を探る研究に取り組みました。現在、センサーの性能を引き出すためのアルゴリズムの設計や実装の仕事をしており、その経験が生きています。



ボーナスで買ったゲーミングPC

卒業後も続く同期とのつながり

学生時代はディスカウントストアで家電販売のアルバイトを6年間続けました。そこで仲良くなった大学の同期とは、大学生活でも互いに切磋琢磨し、卒業旅行ではシンガポールにも行きました。卒業後も変わらず交流が続いており、社会人

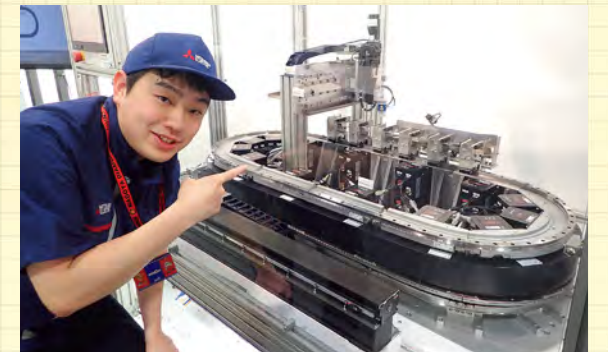


卒業旅行で訪れたシンガポール

になった今も支え合う大切な仲間です。大学生生活の傍ら、アルバイトを長く働き続けた経験から、「継続すること」、「そして「人とのつながりの大切さ」を学びました。

工場の自動化を支える 組み込みソフトウェアを開発

卒業後、ファクトリーオートメーションの分野を志望したのは、工場を自動化することで、人がより創造的な仕事に集中できる社会を実現したいという思いがあったからです。アルゴリズムの設計や実装を担当していますので、与えたプログラム通りに製品が動く瞬間は大きなやりがいですし、ものづくりの面白さを感じています。担当した製品が工場で使われると、「より良い製品を生み出したい」というモチベーションにつながります。将来は、より精度の高いアルゴリズムの設計に挑戦し、自分の技術によって製品の性能や付加価値の向上に貢献していきたいです。



製品に搭載されるセンサーの開発に携わっています。

目の前の学び一つひとつを大切に

学生の頃は、「数学や物理が将来どのように役立つのか」と疑問を持ちながら勉強していました。しかし、実際に製品の設計・開発に携わるようになると、それらの知識を日常的に活用しやすし、数理的な考え方が随所で役立っています。今は将来とのつながりが見えなくても、目の前の学び一つひとつが必ず力になります。ぜひ日々の学習を大切にしてください。





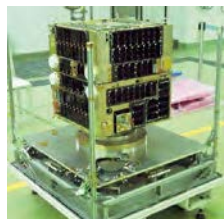
©JAXA

打ち上げられたH3ロケット6号機

2026年6月12日、静岡大学工学部能見研究室が開発した50kg級超小型衛星「STARS-X(愛称:しらいと)」を搭載したH3ロケット6号機の打上げが無事に成功！しらいとは、打上げ約16分4秒後に所定の軌道に投入され、宇宙空間での運用を開始しました。

独自開発した親子衛星「しらいと」

「しらいと」は、親衛星と子衛星で構成される親子衛星で、2つの衛星を結合する独自開発の結合機構を採用しています。50kg級衛星で、これまでのSTARSプロジェクトの衛星と比べて大きく、JAXA「革新的衛星技術実証3号機」の実証テーマ「宇宙テザー技術を用いたデブリ捕獲の技術実証」に選定されています。



©JAXA

「しらいと」のミッションは？

能見研究室がSTARSプロジェクトで目指しているのは、喫緊の課題である宇宙デブリを解決する技術を獲得し、宇宙エレベーターの実現につなげることです。今回、「しらいと」に課せられたミッションは3つ。

- ①宇宙空間でテザー(ロープ・ワイヤ)を1km伸展する
- ②テザー上を小型ロボットが移動する
- ③自衛星が放出したダミーの宇宙デブリ(ごみ)を捕獲する

現在、「しらいと」との通信やカメラ画像の取得に成功し、ミッション実現への初期運用を進めています。



©JAXA

見つけた！ 輝く静大生

部活動・研究・地域連携など、
さまざまな分野で挑戦する静大生をご紹介します。

工学部の能見研究室が開発 超小型衛星STARS-X 「しらいと(愛称)」が 宇宙へ！



「しらいと」を囲む能見公博教授(左端)と研究室のメンバー

愛称募集で485件から決定！ 「白糸の滝」にちなんで「しらいと」に

STARS-Xの愛称募集を2026年5月に行い、全国から485件もの応募をいただきました。どの案からも衛星への期待や温かい思いが伝わり、ミッション実現の大きな力となります。ありがとうございました。選考委員会による厳正な審査の結果、静岡県の名勝で国の天然記念物でもあり、テザーが糸を想起させることから、「白糸の滝」(富士宮市)にちなんで「しらいと」に決定しました。



考案者
青木 様 (東京都豊島区)
青山 様 (東京都杉並区)
上田 様 (静岡県静岡市)

先輩たちからつないだ開発のバトン

「しらいと」は、能見研究室の学生たちが世代を超えて開発を受け継ぎ、多くの企業や関係者とともに作り上げてきた衛星です。それが実際に宇宙へ向かい、軌道投入される瞬間に立ち会えたことは、研究室メンバーにとって大きな喜びです。学生たちは「宇宙での挑戦はこれからです。実証実験の成功だけでなく、将来の静大衛星や宇宙開発全体に生かせる

成果を得るため、すべてのミッションを無事にやり遂げたいです」と抱負を語ってくれました。

【写真右より】開発に携わった
松崎優作さん、渡邊楓万さん
(共に総合科学技術研究科工学専攻2年)



WEB

情報危機管理コンテストで 6年ぶりに「優勝」



情報学部の学生チーム「ITソリューション室_げんこつ」は、企業のインシデント対応を想定し、実践的な技術力や分析力などを競う「第21回情報危機管理コンテスト」で最高賞にあたる「経済産業大臣賞」を受賞しました。今年度は25チームが参加し、5チームが予選を勝ち抜いて決勝に進出。その中で、本学は高度な分析力と的確な対応が評価され、優勝を果たしました。メンバーたちは「過去2年は準優勝だったので、今回優勝できてうれしい。連覇を目指して来年も頑張りたい」と決意を新たにしました。

【写真右より】

- ・高島湊斗さん(情報学部情報科学科3年)
- ・高橋陽拓さん(総合科学技術研究科情報学専攻2年)
- ・河口欣仁さん(同専攻1年)
- ・齊藤遼太さん(情報学部行動情報学科4年)



WEB

馬術部が 全国大会出場決定！



馬術部の堀田直太郎さん(理学部4年)とグレートシール号が、第61回中部学生三大大会で優勝し、全日本学生馬術大会への出場を決めました。昨年はあと一步で逃した全国大会出場。今年は日々の練習の成果を発揮し、悲願の出場権を獲得。積み重ねてきた努力が実を結びました。堀田さんは「先輩やコーチ、後輩、そしてグレートシールの支えがあって優勝できた」と振り返ります。馬術競技の魅力は、馬との信頼を育み、ともに成長すること。後輩たちの成長を支えることも活動の原動力です。「後輩が大会で活躍する姿を見ると、自分のことのようにうれしい」と話します。

全国大会に向けて「悔いの残らないよう全力を尽くし、最高のパフォーマンスを発揮したい」と目標を語りました。



Instagram

応援をよろしくお願いします！



ビジネスプランコンテストで 「第3位・海外チャレンジ賞」



野崎燕仁さん(工学部3年)が「Tongaliビジネスプランコンテスト2026」で第3位と海外チャレンジ賞を受賞しました。しずはま起業部(起業関心層の学生たちによる非公認インカレサークル)部長を務める野崎さんは、参加した114チームの中から16組のファイナリストとして決勝に進出しました。

受賞した野崎さんのプランは、利用者の視界情報をAIが解析し、次の動作を自動提案する義手「I-arm」。スマートフォンで操作でき、3Dプリンタを活用することで軽量化と低価格化が見込める点が特徴です。その独創性や社会課題の解決につながる実用性、将来的な事業展開の可能性が高く評価されました。副賞として、2027年3月に米国で開催される国際的なビジネスイベント「SXSW」への派遣権を獲得しました。野崎さんの今後の挑戦を、ぜひ応援してください。



WEB

レゴで全国の大学をつなぐ！ 静大レゴ部



ユニオン代表の佐藤さん

レゴ部の魅力は、一人では難しい大型作品も仲間と協力して形にできること。作品展示を通してものづくりの楽しさを地域へ届けられることも、大きなやりがいの一つです。レゴ部創設メンバーの佐藤隆貴さん(総合科学技術研究科工学専攻2年)が代表を務める「日本学生レゴ部ユニオン」は、全国8大学が加盟するネットワーク。佐藤さんが各大学の大学祭を訪ね、部長同士のつながりを築いたことが設立のきっかけです。活動の中心は、加盟大学合同で開催する「Japan Brick Expo」。今年は1,310人が来場しました。部長の野村宙希さん(工学部2年)は今後、さらに地域や企業との連携を深め、レゴを通じた交流の輪を広げたいと考えています。



2025年に大学公認化。部員も増加中



レゴ部
WEB



ユニオン
WEB

私たちの研究室

Our laboratory

農学部生物資源科学科 加藤研究室

私たちはポストハーベスト（収穫後生理学）を専門分野に
静岡の特産品である柑橘の色や機能性成分の蓄積メカニズムを
明らかにし、収穫後果実の鮮度保持や栄養・機能性が高い果実の
育成を目指しています！



加藤雅也 教授



馬剛 准教授



張嵐翠 特任准教授



藤井浩 客員教授



約20名の学生が在籍する個性的で賑やかな研究室です！

集合写真を撮る時は
ポストの「P」で
写真を撮ります📷

みかんのオレンジ色をつくる色素です！
当研究室では赤色をつくるカロテノイド「β-シトラウリン」を
つくる遺伝子を世界で初めて特定しました🌟

Our target

温州
みかん



- ・果皮のカロテノイド蓄積に及ぼす植物ホルモンの影響
- ・果肉の糖や有機酸、GABAの蓄積
- ・浮皮や粒化症などの生理障害の抑制

カロテノイドの高蓄積化や糖・有機酸・
GABAの蓄積メカニズムを解明し、機能性
の高い温州みかんの生産に貢献します！！

スダチ



- ・果皮のクロロフィル蓄積に及ぼす植物ホルモンの影響
- ・全ゲノム解析
- ・フラボノイドなどの機能性成分分析

果皮の緑色保持技術の開発や緑色保持機
構を解明し、貯蔵期間の長いスダチの生産
に貢献します！！

ブラッド
オレンジ



- ・果肉のアントシアニンやフラボノイドの蓄積
- ・アントシアニン生合成遺伝子の単離および基質特異性

ブラッドオレンジ特有の赤色をつくるアント
シアニンの高蓄積化やメカニズムの解明に
貢献します！！

Our goal

柑橘の色や機能性成分の蓄積メカニズムを分子レベルで解明し、環境や栽培条件の影響を研究しています。
生産者や消費者に利益をもたらす柑橘を育成し、農業・食品産業への応用を目指しています！！

Our experiments



色素の抽出

みかんの果皮からカロテノイドを抽出しています。
綺麗なオレンジ色ですね🌟 クロロフィルなら緑色、
アントシアニンなら赤色になります。
美しい色素たちに日々癒されてます😊



果実の収穫

ラボでの実験が基本にはなりますが、実験に使う果実の処理や
収穫のために藤枝フィールドなどへ向かいます。



果実品質の分析

HPLC(高速液体クロマトグラフィー)を
用いて成分を分析しています。
カロテノイド、糖、フラボノイドなど…
様々な成分を分析する設備が揃っています。

学生の『やってみたい!』を
大切にしながら、
一人ひとりが主体的に研究や
学会発表に取り組んでいます！



学会への参加

学会では研究成果を口頭やポスターで
発表し、多くの研究者と意見を交わす
ことで新たな知見を得ています。
国際学会での受賞経験もあります！

果肉等の培養

果皮や果肉の培養を行っています。
研究室総出で行う大掛かりな実験です👏



海外の大学との交流

タイの大学と交流があり、当研究室では大学院へ進学すると
現地で学ぶ機会があります。日本では普段触れることのない
刺激を受けながら学ぶことができます！



Our daily life

研究ではありません！

球技大会を開催したり、小学生向けの実験教室を行ったり、時には
オープンキャンパスに向けてショートドラマを制作することも…!!
何事にも全力で取り組むのがポストのいいところです！！

Instagramやホームページもぜひ覗いてください🍊



@POST_SHIZUOKA



ホームページ



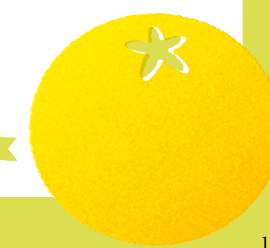
球技大会



実験教室



ショートドラマの撮影





趣味のハイキングで静岡市葵区の高山・市民の森を訪れる

進学を決めました。大学院では、文化人類学の視点から静岡市在住の外国人の子育てや生活実態、地域社会との関わりについて質的調査を行い、多文化共生のあり方を問い直す研究に取り組んでいます。特に、外国人親子との信頼関係の構築など、フィールドワークに力を注いできました。また、多文化共生審議会委員や外国人相談員としての活動を通じて、現場と制度の両面から多文化共生について考えてきました。

将来は、多文化共生を現場で実践しながら、行政・教育機関・民間組織・地域住民をつなぐコーディネーターとして、誰もが安心して暮らせる地域社会づくりに貢献したいと考えています。

Vol.11

多文化共生を実践し、人々をつなぐコーディネーターに

ドーハーフォン(ベトナム出身)

人文社会科学部 言語文化学科(2020年卒業)

(2024年4月より人文社会科学研究科 所属)

2025年7月より公益社団法人静岡県国際経済振興会 勤務

静岡大学は地域との連携が強く、地域に根ざした豊富な研究蓄積を生かして、地域課題を専門的に分析し、実践へとつなげる力を養うことができると考え、



現在の仕事で参加したABP 10周年記念パーティーにて恩師と再会



静岡大学の授業の一環で「留学生と学ぼう!」を開催



アジアブリッジプログラム(ABP)は、静岡県とアジア諸国の架け橋として活躍する人材を育成するため、企業や自治体と連携して、静岡大学で学ぶ留学生を応援しています。ご支援いただいている企業の皆様のおかげで、開講10周年を迎えることができました。



ABPについて



ABP10周年記念特設サイト

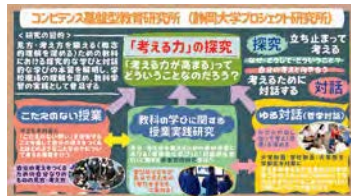
プロジェクト vol.3 研究所レポート

プロジェクト研究所は、学内研究者の連携や産学官連携を促進し、自主的な研究活動を支援する静岡大学独自の制度です。学部を越えた連携や企業など外部の研究者との連携により、未来をリードする新たな研究が生まれています!



コンピテンス基盤型教育研究所

「考える力が高まるってどういうことなのか」について、問いを深めるための探究や対話に関する研究に取り組んでいます。教科の知識を身に付けることを通して、「考える力が育つ」ではなく、「考える力を育むために教科を学ぶ」という視点から、教科における見方・考え方や「概念を理解すること」の意味を探究していきます。また、探究的・対話的な学びの本質を明らかにし、その成果を学校現場で授業実践につなげることを目指しています。



「考える力」の探究(「考える力」が高まるってどういうことなのだろう?)



研究所長
教育学部
野津 一浩 准教授

研究所WEBサイト



・考える力
・探究
・見方/考え方
・対話

データ駆動型ソリューション研究所

AI応用力を備えた課題解決型人材の育成を目指して、企業向けDXソリューションを提供する情報系企業と連携し、数理・データサイエンス教育カリキュラムの研究・開発を進めています。2025年度は、研究所企画の地域課題探究を学んだ学生が、藤枝市立図書館の利用実態について機械学習やデータ分析を行い、改善策を市の担当者に提案しました。また、藤枝東高校2年生に地域課題解決を通じた数理データサイエンスの魅力を紹介しました。



研究所企画の地域課題探究を学んだ学生が高校生に数理データサイエンスを紹介



研究所長
理学部
田中 直樹 教授

研究所WEBサイト



・数理データサイエンス教育
・産学連携
・AI応用力育成
・地域課題の解決

Shizudai Mini News

4月・7月に記者懇談会で 本学の最新の取組を紹介

本学では、報道機関の皆様にも本学の特色ある研究や地域・国際連携活動への理解を深めていただく機会として、記者懇談会を定期的に行っています。

今年度第1回は、4月24日に静岡キャンパスで開催しました。プロジェクト研究所の



未来創成ビジョンを説明する日誌学長

事例として「登呂遺跡で栽培した赤米による日本酒造り」(発酵とサステナブルな地域社会研究所、登呂農耕文化研究所)について、横濱竜也教授、大原志麻教授、篠原和教授(人文社会科学部)、丑丸敬史教授(理学部)が説明しました。



(左より)大原教授、横濱教授、登呂遺跡赤米試験醸造酒

さらに、循環型社会の実現に向けた研究として、静大発ベンチャー企業のS-Bridges株式会社による植物由来の未利用資源の有効活用、Aoi

Gin Craft Technology株式会社による静岡の特産品を活用したクラフトジンの開発・販売について、一家崇志教授(農学部)が説明しました。



一家教授



クラフトジン

第2回は7月17日に浜松キャンパスで開催しました。インドの連携大学や自治体、企業との協働による世界展開力強化事業「InSPIRE」(インスパイア)について、栗井光一郎副学長が「人的交流を通じて、産業高度化と地域社会に貢献する人材を育成したい」と説明しました。

また、プロジェクト研究所の事例紹介として、「土木情報学研究所」の所長を務める木谷友哉教授(情報学部)が、地域インフラをデータで守る研究について説明しました。



栗井副学長



木谷教授

キャンパスアイデア甲子園 アイザワ証券との連携10周年

本学とアイザワ証券株式会社の包括連携10周年を記念し、「キャンパスアイデア甲子園」を開催しました。大学生活で感じる課題や困り事の解決策を提案するもので、多数の応募から7チームが決勝に進出し、アイデアを磨き上げて発表しました。



最優秀賞に選ばれたのは、留学生の日本語学習や生活支援を目的としたアプリ「シグッピー」の開発を提案したチームです。今後100万円を上限に、本学と同社の協力のもと、学内で実現に挑戦できます。リーダーの吉田厚輝さん(教育学研究科2年)は「学部も言語も異なるメンバーが得意分野を生かして考えた」とチーム力をアピール。実現に向けて意欲を語りました。



どの発表もすごい! 決勝の動画はこちら

逃げる“かがく”は役に立つ!? 親子向け防災教育で全国表彰

本学防災総合センターなど4機関が実施する防災・減災ワークショップ「ヤバい! 逃げる“かがく”は役に立つ!」が、第12回ジャパン・レジリエンス・アワード(強靱化大賞)2026で優秀賞を受賞しました。小学生と保護者を対象に、災害時の避難や防災を体験的に学ぶプログラムで、2020年から開催しています。



参加者たち
河川地形模型で防災を学ぶ

本学の前田賢治准教授が企画運営や講演を担当し、学生もファシリテーターとして参加。防災意識の変化を聞いたアンケートでは、参加者だけでなく、学生の意識向上が確認されており、防災人材の育成や地域のレジリエンス向上への貢献が高く評価されました。今後も研究成果の社会実装を進め、地域に根差した防災・減災活動に取り組んでいきます。

インドのSRM科学技術大学と InSPIREプログラム協定を締結

本学が2013年に学術交流協定を締結して以来、交流を重ねてきたインドのSRM科学技術大学(SRMIST)の学長らが7月27日、本学を訪問し、InSPIRE(インスパイア)プログラムに関する協定を締結しました。調印式には両大学の学長らが出席し、今後の連携強化に向けた決意を共有しました。



InSPIREは、本学がインドの大学や自治体、企業と連携して推進する人材育成プログラムです。本協定により、学生の派遣・受入れや研究者交流をさらに促進し、教育・研究の両面で連携を深めながら、両大学の協力関係を新たな段階へと発展させていきます。

一行は、本学学生のインド研修壮行会に参加し、農学部の研究施設なども視察しました。今後、研究分野における連携や交流のさらなる発展が期待されます。



情報学部30周年記念式典開催 新キャラクター「じじじ」誕生

本学情報学部は、創立30周年を記念して記念式典・祝賀会を開催し、来賓や卒業生、学生、教職員など約150人が節目を祝いました。1995年、日本の国立大学で初めて「情報学」を冠する学部として設置された同学部は、「文工融合」の理念のもと、教育・研究を展開しています。また、30周年記念事業として学部キャラクターを募集。35作品の中から、高橋彩華さん(同学部3年)が考案した「じじじ」が最優秀賞に選ばれました。AIや情報技術をモチーフにしており、名称は、学部を構成する3つの情報系学科にちなみ「情報」の最初の音「じ」を3つ組み合わせたものです。



「じじじ」考案者の高橋さん
情報学部のシンボルとして活躍が
期待されます